

『洪武正韻』依拠方言

望月真澄

1. 序 論

『洪武正韻』の洪武8年(1375)3月18日の宋濂の序には、
 「皇帝は学問を尊び、政務の暇の折り、親しく韻書をご覧になり、その分類が正しくなく、実際の語音と開きがあるとされ、文学・言語に明るい臣下を呼んで〔韻学は江南に生まれたが、正しい音を失っている。独用とあるのを纏めて東・冬1韻、清・青1韻のように改めよ。また、逆に、一方、1韻のものを2韻にしなければならない虞・模、麻・遮のようなものもある。広く音韻に通じている者に質して重ねて訂正して定本を作れ〕と言われ、榮韶鳳らが皇帝の言に従い、精密な研究と深い思索とによって、一に〈中原雅音〉で確定した。また、方言に拘泥せず、上下に理解できないことのないようにと劉基らにも質問して6度も原稿を書き写して編集し終えた。注釈は一に毛晃父子の旧版によって16巻76韻の書とし、これを奏上し、名前を頂いて『洪武正韻』と言う。」のように、概略書かれている。

この『洪武正韻』は、明の時代にはしばしば翻刻され、その影響は大きかった(注)。それが清代には軽視され翻刻もされず、四庫全書「提要」では、編者の宋濂のことを曲学阿世・無反省・狂っているとまでけなしている。確かに前掲序文の末尾には、宋濂自身が「はずかしながら私は才識闇劣。」などと遜ってはいるが、「だからお前は闇劣だ。」とは言えない。(事実、明史・宋濂伝には、性、誠謹とか、状貌、豊偉の語がある。)しかし、「提要」は、明の詩人李東陽(1447-1516)の『懷麓堂詩話』の「明初、顧祿(松江の人)が宮詞を作るとき、言語統制が朝廷に依ってなされるものと考えたせいか、彼の詩集を見ると『洪武正韻』そのものの解釈に従っている。この書が出たばかりの時には、この書が速やかに広まることを願ったからであろう。」と言う部分を引いて、評価の客観性の保持にもつとめながら「しかし、明末にはとうとう天下に行わ

れなくなった。人人の是非の判断と言うものは公平で、政治に左右されるものではない。」「ただ、本書を四庫に取り入れるのは歴史的資料としての意味からだけである」と述べている。

張世禄『中国音韻学史』(1938初版・1984重版)では、
「序文で[一以中原雅音]と言っているが内容上、決して純粹に北音系統に属しているのではない。一つには旧韻書と妥協し、一つには当時の南方の方音を交えている。だから、本書は北音韻書の南方化の始まりである。中原雅音と言うのは固定した一種の北音韻書を指しているのでは決してない。本書の直接の根拠は『礼部韻略』等の書であるが、旧韻の韻分部に対して、いわゆる中原雅音に依り根本的な改正をした。単に旧韻を合併しただけでなくさらに分析を加え、各字の音を新たに決めた。中原雅音によって帰納した結果、分部の上では『中原音韻』とだいたい一致するが、その他の面では純粹に北方音系統には属さない。それは撰述者が答禄与権以外はみな南方人であるからである。『洪武正韻』序文で[方言に拘泥しない]と言っているのは、正しくその書の内容が南方方言を交えていることを表明しているのである。『洪武正韻』で22部のうち、東・真・寒など10部の陽韻に対応して、屋・質・曷など入声10韻があるのは、旧韻の踏襲であるが、旧韻の直録ではない。実際は江左の呉音を採用しているのである。劉文錦の「洪武正韻声類考」では31声類を帰納したが、全濁音の存在等は『中原音韻』とは反する現象であるところから、我々としては、『洪武正韻』は、分部の点では北方的であるが、声母・声調の点では旧韻と南方方音を採用していると断定する。このような南北雜糅の結果、後の曲韻と北音韻書の変化に[南は洪武に従い、北は中原に尋ねる]という二筋の大路を取ることとなった。」

この張世禄の解説は、今日の『中国大百科全書(語言・文字)』(1988)や、『中国學術名著提要(語言文字卷)』(1992,復旦大学出版社)にも受け継がれている。但し、この両書に注目すべき共通した指摘がある。それは羅常培「論竜果夫《八思巴和古官話》」(1959, 12, 【中国語文】)を引いて、

「14世紀前後の北方音には官話を代表とする読書音と、北方方言を代表とする説話音とがあり、読書音は保守的で旧時の語音特徴を保留している。『洪武正韻』は正しくこのような読書音を代表し、『中原音韻』の方は説話音を代表している。」

の見解を示している点である。この見解は元来、А.А.Драгуновの見解で、「官話代表の読書音は、南北方言をかき集めた最小公倍数の統一官話」

と述べ、これにパスパ碑文・『洪武正韻』『切韻指南』が属するとし、この見解に羅常培が賛意を表しているのである。

日本ではこれより少し早く、辻本春彦氏の「洪武正韻反切用字考一切上字について一」（1957,【東方学】13輯）がある。

ここで氏は「中原雅音」についての満田新造博士・服部四郎博士の南京音説を否定し、『洪武正韻』編集意図が『礼部韻略』の改訂にありとして、いわゆる『増韻』との比較をするという方法から、「中原雅音」の音系が『中原音韻』のそれと非常に近いものであった、この実際の「中原雅音」をもとに『増韻』を改編したため、濁音を残すというような混乱を生じるにいたった、と結論づけている。

以上の『洪武正韻』序文・諸評価・諸研究などから、問題の所在が明らかになって来る。すなわち、『洪武正韻』編集に関係した人たちは、

楽韶鳳, 安徽省全椒

宋濂, 先是浙江省金華, 濂に至り浦江に移る。 [金華片]

王僕・李叔允

朱右, 浙江省臨海 [台州片]

趙燠, 江西省新喻

朱廉, 浙江省義烏 [金華片]

瞿莊・鄒孟達

孫蒼, 広東省順徳

答禄与権, 蒙古人

質正に関わった人は、

汪広洋, 江蘇省高郵

陳寧, 湖南省茶陵

劉基, 浙江省青田 [処衢片]

陶凱, 浙江省臨海 [台州片]

で、ちなみに [] 内に、銭乃荣『当代呉語研究』（1992, 上海教育出版社）の方言分区の名称を付した。明史にその貫籍が明記されていない者はともかくとして呉語方言区に属する者（張世禄言う所の南方人）が圧倒的に多い。にもかかわらず序文では[一以中原雅音]と書かれている点が問題となるのである。もっとも、明史卷136, 楽韶鳳列伝では、

帝以旧韻出江左, 多失正, 命与廷臣参考中原雅音正之, 書成, 名『洪武正韻』のように「参考」と記述されているが。

この編者の貫籍と [中原雅音] との捻れの問題をいかに捉えるかについて私見を述べてみたい。

2. [中原雅音] について

『洪武正韻』序文に言う [一以中原雅音定] の [中原雅音] は書名であるのかどうかの議論は、学会を賑わしてきた。

讚井唯允氏は「『中州音韻』小考」(1981, 【中国語学】228) で、明代の章黼撰『韻学集成』の摘録が果して『中原雅音』の音注をそのまま転録したものかどうか、としたうえで、

○『中州音韻』の底本は『中原雅音』ではないか。『中州音韻』の義注は『洪武正韻』義注の抜粋である。

○『洪武正韻』の濁音上声小韻は『中州音韻』では清去もしくは濁去となり、一定しない。『中原雅音』では濁上濁去は一律に清去となる。

○『中州音韻』に濁去声が存在する点で『中原雅音』と著しく異なるが、これは王文璧が、呉語の読書音に従って訂正したのであろう。呉語の読書音は、呉語に対する意味での中原の雅音であり、中古濁上は濁去に合流する。

○『中州音韻』は、呉音に対する、雅音の根本韻書 (南方読書音の藍本) たらんことを目指した。

という重要な指摘をしている。

許徳宝「『中州音韻』的作者、年代以及同『中原雅音』的關係」(1989, 【中国語文】211) では、

『中原雅音』は『中州音韻』であり。周徳清が確実に刊行したのである (1341-1367)。

としている。

『中原雅音』が即『中州音韻』とは今の段階では何とも言えない。汪経昌校輯『曲韻五書』の中の『中州音韻』(1985, 広文書局3版。慶谷寿信氏ほか編『中州音韻音注索引』) は、『韻学集成』所引『中原雅音』との間に隔たりがあり、讚井氏も指摘するように、『韻学集成』の摘録は『中原雅音』をそのまま転録したものかどうかの疑問が、当然湧いて来る。

今、極く1例として、『洪武正韻』『中州音韻』『中原雅音』『中原音韻』の対照を表で示してみる。[] は各韻書の所属韻目である。『中原音韻』は、仮に再構成音 (内, 数字は1陰平2陽平3上4去) を示す。『洪武正韻』は後に述べ

るように、同一韻目でも二分される場合が多いのでABで区別をしておく。

洪武	中州	雅音	中原
A 危=吾回 [灰]	呉帰 [齊微]	余回	uei 2 [齊微]
B 為=于媿 [灰]	呉帰	余回	uei 2 [齊微]
鄙=補委 [紙]	邦米 [齊微]	邦每	pei 3 [齊微]
佩=歩味 [隊]	傍妹 [齊微]	貝	貝 pei 4 [齊微]
			佩 p'ei 4 [齊微]
避=毗意 [寘]	旁謎 [齊微]	貝	避 pei 4 [齊微]
秘=兵媚 [寘]	邦謎 [齊微]	貝	秘 pi 4 [齊微]
罪=徂賄 [賄]	臧遂 [齊微]	醉	罪醉 tsuei 4 [齊微]

前掲、許徳宝論文の言うように内閣本『中州音韻』は『中原音韻』と同じ編者、周徳清と主張したくなるような両者の韻目立てとなっている。しかし、許氏がまた『中原雅音』即『中州音韻』と言う点には、すぐに賛成できない特徴が相互に見える。

序文で「一以中原雅音定」と書かれているためにこれまでに拘泥してきた『中原雅音』の問題は、しばらくこれを置き、後日の研究に委ねることとし、次に『洪武正韻』の内部そのものについて少し深く追求していくことにしたい。

3. 『洪武正韻』の二重構造

河野六郎博士の「呉方言における咸攝一等重韻の扱い方について」(『東洋研究』53号, 1978)では、現代呉方言における咸攝一等重韻の分布特徴が、また、『洪武正韻』反切系聯にも見られるところから、『洪武正韻』が呉方言に基づくものという仮説に現実性が確保できると主張されている。先生は、「呉方言の咸攝は、牙喉音では覃談の区別が無かったのに対し、舌音では覃韻は一等韻、談韻は二等韻の特色を示すということになる。」と述べられている。小論もこれにならい、蟹攝一等重韻、去声の「代・隊」「泰」の分布と、その現代呉語方言の状況を調査した。『洪武正韻』では、去声の「泰」が開口、「隊」が合口である。仮に一等「泰」をA、一等「代」をC、二等類を併せてBとする。Bには、冷僻字で自信が無いのか『増韻』と全く同じ反切字の[影]声母組と[初・徹]声母組とが見える。これは便宜的にB1・B2とした。これに更に合口も出てくるので、含め考える。これに試みに前述、銭乃榮氏『当代呉語研究』を資料として上海方音を記入していくと、次のような表を得た。

うまく調査対象とされたものはよいが、はずされているものも多いが目下止むをえない。

『洪武正韻』去声「泰」韻 声母別分布

一 等

二 等

A	C	B1	B2	合口
k 蓋 kE		戒 kA		怪 ka
k' 慨 k'E		鞞		快 k'A
ng 艾		睡		外 ngA
ɣ 害 hE		械		壞 va
' 愛'E		噎	隘	
t 帶 tA	戴 tA			
t' 泰 t'A				
d 大 dA	代 dE			
n 奈 nE				
l 賴 lA	徠			
ts	再 tsE			
ts'	菜 ts'E			
dz	在 zE			
s	塞 sE			
tʂ		債 tsA		
tʂ'		嘍・楚邁	瘥・楚懈	
dʒ		砦		
ʂ		晒		
p		拜 pA		
p'		派 p'A		
b		敗 bA		
m		壳 mE/mA		

この表で判ることは「泰」韻牙喉音ではE, 舌歯音ではA, 「代」韻では舌歯E, 二等は牙喉・舌歯ともAであるということである。これは前述の「牙喉音で一等重韻に区別なく, 舌音では一等重韻に区別がある」という呉語白話音の咸攝の事実と呼応している。また, 合口が『洪武正韻』で, 「泰」に置かれるのは, 今日なお多くの呉語でこれら合口音が, 白話音A, 讀書音UAの

ような音形で存在し、この白話音の方を採録しているものであることが判る。これを図式で示すと、

現代呉音	Ak	t	Ct	Bk	p	合k	洪武の処理
読書音	E	E	E	iA	A	UE	泰」Ai/iAi
白話音	E	A	E	A	A	A	Ai/ai

となり、《洪武時代のオモテむき官韻としては [Ai/iAi] で十分「雅音」たりえますよ。しかし呉方言の読書音・白話音の双方を区別したい人にも利用できます。区別を無視しても十分許されます。》と言う程度の編集方針で編集されているものであろう。

葉祥苓「蘇州方言中的文白異読」（『呉語論叢』1988，上海教育出版社）には、蘇州における今日の文白異読字は300字に近く、常用字の7パーセント程であると言う。

もう1つ平声「灰」韻のまとめのみを示す。

現代呉音	A	B	洪武の処理
読書音	UE	UE	灰」UAI
白話音	UE	y	UAI/iuAI

例えばA類には「灰・危・回・堆・雷・杯・枚」

B類には「規・龜・閨・葵・隨・吹・垂・衰」

などがあり、文字に親しむほどの人たちは、これほどの常用字の読書・白話両音の知識はあって当然の事、この事情を踏まえて『洪武正韻』の時代には上記のような処理を編者は果たしていたのであろう。

4. まとめ

以上見てきたように『洪武正韻』という韻書は実に一筋縄では、その真の姿を見せてくれなかった。特に序文に言う[一以中原雅音定]の一句が長年に渡って人人を悩ませた。しかし、Драгуновや、羅常培などは、既に早くからこの書の重層性に着目していたのではないだろうか。讀井氏の指摘「呉語の読書音は、呉語に対する意味での中原の雅音であり」も既に正鵠を得たものである。小論では河野博士の明晰な推論に圧倒されていたので、『洪武正韻』は、どうしても呉語を中心に置いて考察しなければならないと確信していた。

「泰」韻の例ばかり挙げて気が引けるが、

[帶] 当蓋切の下に「戴・載」などを並べ、またすぐ隣に、

[戴] 丁代切を置き、またまた「載」を置く。

これら両者は同一声母であり、その上同一字重出でまでもある。『増韻』も全く同じ反切のため盲従して機械的に採録したのかと考えると、一方、

[泰] 他蓋切の小韻には、「太太汰」と共に「貸態詒給」が一韻となっている。しかも「貸態」群の『増韻』の反切「他代切」は無視している。これではこのような理不尽に「提要」の筆者に限らず腹を立てるのも当然と理解できそうである。しかし、呉語白話音の現実は厳然としてあり、音韻法則を超越して存在する。この事実に基づいて編集している以上、宋濂ら編者に、何らわが身をよましにする自覚は生まれなかったのである。言い換えれば編者らは実に忠実に生きた言語を採録することに勤めたのである。「雅音」で決定と言うのは讀書音・白話音の二重性を折衷して、前述のように一つの韻目中に纏めあげた作業を指して言っているのであろう。

清の戯曲作家兼理論家の李漁(1611-1679)の南京にある別荘を芥子園と言う。芥子景、入れ子式構造のミニチュアに無際限の自然の美や驚異を鑑賞しようとした呉方言を話す人人は、韻書の世界でも壺中の天を構築しているように見えてくる。大きく見れば「雅音」で纏めているようでもあるし、中身を子細に眺めれば、そこには呉語の生き生きした重層性も見えて来る。『洪武正韻』のこのような深い意図を読み取って、明、万暦年間(1603)に、呂坤の『交泰韻』という河南方言を採録した韻書が生まれる(のではないだろうか)。韻書中に天地を包括するという意気込みから生まれたのである。

洪武帝自らが日本五山僧、絶海(1336-1401)を迎えたときに作ったという詩の押韻は『洪武正韻』の韻立てに合致していない。ましてや永楽帝即位するや永楽18年(1420)北京遷都後はこの呉語に基づく韻書は次第に疎まれ続けたのであろう。(1994・6・20)

注

杜信孚『明代版刻綜録』(1983, 揚州古籍書店)によれば

明正徳3年(1508)張淮刊

明嘉靖27年(1548)益藩刊

明嘉靖40年(1561)劉以節刊

明隆慶6年(1572)衡藩厚德堂刊

明万曆2年(1574) 司礼監刊

明天啓2年(1622) 広益堂刊 などがあり、

『北京図書館古籍善本書目』によれば、

明初刻本2種のほか、

明正徳6・10刻本・嘉靖27衝藩刻藍印本・崇禎刻本の4本ほかが収録される。本稿では帰安陸氏守先閣書籍、静嘉堂蔵本、刊年不詳。8行小字双行24字黒口4周双辺のものを用いた。